

大中華文庫

漢日對照



大中華文庫

漢日對照

紅樓夢

紅樓夢

VII

大中华文库

汉日对照

大中華文庫

漢日対照

红楼梦

紅樓夢

VII



曹雪芹 高鹗 著

伊藤漱平 译

曹雪芹 高鹗 著

伊藤漱平 訳

人民文学出版社

人民文学出版社



国家出版基金项目
NATIONAL PUBLICATION FOUNDATION

大 中 华 文 库

大 中 華 文 庫

第八十八回

博庭欢宝玉赞孤儿 正家法贾珍鞭悍仆

却说惜春正在那里揣摩棋谱，忽听院内有人叫彩屏，不是别人，却是鸳鸯的声儿。彩屏出去，同着鸳鸯进来。那鸳鸯却带着一个小丫头，提了一个小黄绢包儿。惜春笑问道：“什么事？”鸳鸯道：“老太太因明年八十一岁是个暗九，许下一场九昼夜的功德，发心要写三千六百五十零一部《金刚经》。这已发出外面人写了。但是俗说《金刚经》就像那道家的符壳，《心经》才算是符胆，故此《金刚经》内必要插着《心经》，更有功德。老太太因《心经》是更要紧的，观自在又是女菩萨，所以要几个亲丁奶奶姑娘们写上三百六十五部，如此又虔诚又洁净。咱们家中除了二奶奶——头一宗他当家没有空儿，二宗他也写不上来，其余会写字的，不论写得多少，连东府珍大奶奶姨娘们都分了去，本家里头自不用说。”惜春听了，点





第八十八回

庭歡を博さんとして 宝玉 孤児を讀むること
家法を正さんとして 賈珍 悍僕を鞭うつこと

さて、惜春が碁譜に頭をひねっていると、急に院内で誰やらの彩屏を呼び立てる声が……。それこそは余人にあらず、鴛鴦の声なのでした。彩屏は出ていって、鴛鴦と連れ立ち奥にはいってきます。その鴛鴦はといえば、侍女見習を一人伴に連れていて、これに小さな黄の絹手帕の包みを提げさせています。惜春がにこやかに、

「なんのご用？」

とたずねました。すると鴛鴦の答えますには、

「実はご後室さまが明年は八十一歳になられ、『暗九』に当たりますにつき、九昼夜の大念仏をご発願なさいました。なおまた三千六百五十一部の『金剛經』の写經をご発心なされ、この方はもう表の人たちの手で写させるよう手配済みでございます。ただ俗にいいますように、『金剛經』はあの道家の符籙（符籙——道家の秘密文書——の普通のもの）といったところで、『心經（般若心經）』こそは符胆（符籙のごく重要なもの）に当たるもの、それゆえ『金剛經』のなかに『心經』を入れるようにいたしてこそ、その功德もまた格別というわけでございます。ご後室さまは、ついては『心經』は別して大切なお經で、観自在（菩薩）さまは女菩薩でもあられるところから、お身内の若奥様や姫さまがたみなさまのお手でもって三百六十五部写していただきたい、そうしていただければ、内に誠も籠り清浄でもあるから、とかようにお望みなのでございます。従いましてこちらの〔西の〕お屋敷では、二の若奥様（熙鳳）は除けまして——あのおかたは第一に家事をご覧になってそのお暇もなく、第二に字をお書きになるほうは駄目でいらっしゃるからでございますが——それ以外の字をお書きになれますかたには、多少を問わずにお願いいたします。東のお屋敷の珍さまの奥様（尤氏）をはじめお部屋さまがたでさえ、みなさま手分けしてお引き受けくださいましたような次第、お膝もとのかたがたともなりますれば、むろ



头道：“别的我做不来。若要写经，我最信心的。你搁下喝茶罢。”鸳鸯才将那小包儿搁在桌上，同惜春坐下，彩屏倒了一钟茶来。惜春笑问道：“你写不写？”鸳鸯道：“姑娘又说笑话了。那几年还好，这三四年来姑娘见我还拿了拿笔儿么。”惜春道：“这却是有功德的。”鸳鸯道：“我也有一件事：向来服侍老太太安歇后，自己念上米佛，已经念了三年多了。我把这个米收好，等老太太做功德的时候我将他衬在里头供佛施食，也是我一点诚心。”惜春说道：“这样说来，老太太做了观音，你就是龙女了。”鸳鸯道：“那里跟得上这个分儿！却是除了老太太，别的也服侍不来，不晓得前世什么缘分儿。”说着要走，叫小丫头把小绢包打开，拿出来道：“这素纸一扎是写《心经》的。”又拿起一子儿藏香道：“这是叫写经时点着写的。”



んのことでございます」

惜春はそれを聞くと、うなずいて、

「ほかのこととなると、わたし、なに一つ満足にできないわ。でも、写経をする段になったら、わたしは一番信心の篤い方でしょうね。あんた、それを置いて、お茶でも召し上がれ」

といいました。鴛鴦はそれではと、小さな包みを卓上に置いて、惜春といっしょにかけました。彩屏が茶を注いできて出します。

「あんたは書くの？」

と、惜春が笑いながらたずねました。鴛鴦はそこで、

「まあ、姫さまはご冗談ばかり。先年うちならまだしも、ここ三、四年のあいだ、姫さまはわたくしがちょっとでも筆を手にしたところをご覧あそばしたことがおありでして？」

「でも、こればかりは功德を積むことなのですからね」

と、惜春。すると鴛鴦はいいました。

「実はわたくしなりに一つだけさせていただいておりますの。これまでご後室さまをお寝かせ申してから、わたくし、自分ひとりで米念仏を心掛け、もう三年の余にもなります。そのお米を大切にたくわえておき、いずれご後室さまが功德を施されるときには、それも中に差し加えていただき、み仏のお供米、施飯のお米にお使いいただく心組みでまいりました。これもわたくしとして、ほんの気持だけのことでございますが……」

「そういうことだと、ご後室さまが観音さまにおなりになったあかつきには、あんたはさしずめ竜女というわけだね」

「滅相もない、どうしてそれだけの仕合わせを授かっておりましょう！ もっとも、ご後室さま以外は、ほかのどなたにもご奉公は務まりそうにないところをみますと、前生からなにかのご縁があったのかも知れませんね」

そこまでいうと、鴛鴦は立ってゆこうとし、侍女見習に小さな絹の包みを開けさせて、中味を取り出し、

「この白紙一束が『心経』を写していただく料紙でございます」

と説明し、別に一束の蔵香（西藏産の線香）を取り上げ、

「こちらは写経をなさる際、点けてお書きいただくようにとのことで」

と言い添えます。惜春はそのたびにうなずいて承知しました。



惜春都应了，鸳鸯遂辞了出来，同小丫头来至贾母房中回了一遍。看见贾母与李纨打双陆，鸳鸯旁边瞧着李纨的骰子好，掷下去把老太太的锤打下了好几个去。鸳鸯抿着嘴儿笑。忽见宝玉进来，手中提了两个细篾丝的小笼子，笼内有几个蛴蛎儿，说道：“我听说老太太夜里睡不着，我给老太太留下解解闷。”贾母笑道：“你别瞅着你老子不在家，你只管淘气。”宝玉笑道：“我没有淘气。”贾母道：“你没淘气，不在学房里念书，为什么又弄这个东西呢？”宝玉道：“不是我自己弄的。今儿因师父叫环儿和兰儿对对子，环儿对不来，我悄悄的告诉了他。他说了，师父喜欢，夸了他两句。他感激我的情，买了来孝敬我的。我才拿了来孝敬老太太的。”贾母道：“他没有天天念书么，为什么对不上来！对不上来就叫你儒大爷爷打他的嘴巴子，看他臊不臊。你也够受了，不记得你老子在家时，一叫做诗做词，吓的倒像个小鬼儿是的。这会子



鴛鴦はそこで神輿を上げ、暇を告げて出てくると、侍女見習と連れ立って後室の部屋にきて、ひととおり報告をしました。ちょうど後室は李紈を相手に雙陸遊びのさいちゅうでしたので、鴛鴦はわきで見物を極めこみます。李紈はついているとみえ、骰子を投げては後室の駒石を次から次へといくつも逆もどりさせてしまいました。鴛鴦は含み笑いをしています。

と、そこへひょっこり宝玉が顔を見せました。手には細い竹籤でこしらえた小籠を二つ提げており、その籠には何匹かのきりぎりすがはいっていました。

「お祖母さまが夜分よくお寝みになれぬとか伺いましたので、お慰みまでにお手もとに置いていただけたらと、これを進上いたします」

との宝玉のことばに、後室は笑いながら、

「これ、おまえ、駄目ではないかえ、お父さまのご不在を見すまし、いたずらばかりしておったのでは」

とたしなめます。宝玉も笑って、

「わたくし、別にいたずらなどいたしてはおりません」

「いたずらはしてないとおいいだが、家塾でじっくり勉強もせず、なぜまたそんなものを捕えたりするのさえ？」

「いえ、これは自分で捕えたものではありません。実は今日、お師匠さまが環ちゃんと蘭ちゃんに対句作りをおさせになったところ、環ちゃんがうまくできずにおりましたので、わたくしがこっそり教えてやりました。あの子がそのとおり申しましたら、お師匠さまはお喜びになって、その二句はよい出来だ、とお賛めになりました。あの子はわたくしの情けに感じましたものか、これを買ってきてお礼にとくれました。それではと、わたくし、これをお祖母さまに進上いたすつもりで持参したような次第でございます」

「あの子は毎日ろくに勉強もしておらぬのか、対句一つなぜできなかったのだろう！できなければできぬで、代儒どのに頬つぺたをひっぱたいてもらいましょう。そんな目に遭っても恥ずかしがらずにいられるか、あの子の顔が見てみたいものだ。そういうおまえだとて、これまでひどい目に遭ってきたね。ほら、おまえの親父どのが屋敷においでのとて、詩だの詞だのを作れとおっしゃっただけで、もうびっくりして、まるで小鬼かなんぞのようにおどおどしてはいないかえ。それがいまではまた大きな口をたたくようになったのだからね！それにしても、あ



又说嘴了！那环儿小子更没出息，求人替做了就变着方法儿打点人。这么点子孩子就闹鬼闹神的也不害臊，赶大了还不知是个什么东西呢。”说的满屋子人都笑了。贾母又问道：

“兰小子呢，做上来了没有？这该环儿替他了。他又比他小了。是不是？”宝玉笑道：“他倒没有。却是自己对的。”贾母道：“我不信。不然就也是你闹了鬼了。如今你还了得，羊群里跑出骆驼来了，就只你大。你又会做文章了。”宝玉笑道：“实在是他作的。师父还夸他明儿一定有大出息呢。老太太不信，就打发人叫了他来亲自试试，老太太就知道了。”贾母道：“果然这么着我才喜欢。我不过怕你撒谎。既是他做的，这孩子明儿大概还有一点儿出息。”因看着李纨，又想起贾珠来：“这也不枉你大哥哥死了，你大嫂子拉扯他一场。日



の環ちゃんという子はさっぱり見込みのないやつだ。人に代わりに作ってもらい、手を使って仕入れてきた物を袖の下に使うのだからね。あんな小童のうちから、もう蔭でそこそ立ち廻るような芸当を覚えて、それでいっこう恥ずかし気もないふうだ。このまま成人したら、いったいどんな代物ができ上がることやら……」

と、後室。これには部屋じゅうの者がどっと笑いました。後室はまたたずねて、

「それで蘭ちゃんだが、あの子はできたのかえ？ こんどは環ちゃんが代わりになにしてやらねばならぬところさ。あの子はまた環ちゃんに比べて年齢がゆかぬのだからね。どうだったえ、そうしたの难道？」

すると宝玉は笑いながら、

「いえ、あの子は人頼みはせず、ちゃんと自分で対句をこしらえました」

「さあ、わたしには信用できかねるね。さもないければ、その分もおまえが内緒でどうかしてやったか、どちらかだろう。でもまあ、いまではおまえもどうやらものになってくれて、『羊の群れから駱駝が跳び出す』とはこのこと、なにせおまえだけが年かさなのだからね。そのうえおまえは文章（八股文）も作りこなせるようになったのだし……」

と、後室。宝玉は笑いながら、

「いえ、それが実際あの子が作ったのでございますよ。お師匠さまも、この子はいまにかならず立身することだろうよ、とお賛めになったほででした。お祖母さま、信用がならぬとおっしゃるなら、すぐにも誰かをやってあの子を呼び寄せ、じきじきお試しになってみられたら、お祖母さまにもその場でわかりいただけましょう」

「いや、真実そうであってくれば、わたしとしてもこんな喜ばしいことはない。わたしはただおまえが出まかせをいっておるのではないかと思っただけの話さ。おまえのいうようにあれが自分で作ったのだとすれば、おおかたあの子もいずれまずまず立身がかなおうというものだ」

後室はこういって、李紈の方を見やりましたが、それにつけてもまた賈珠（李紈の亡夫）のことが思い出され、

「これでおまえの兄さんが亡くなったあと、この嫂さんがあの子を一所懸命育て上げたのも無駄でなかったというものだね。ゆくゆくはおまえの兄さんに代わってわが家の誉れをいや増してくれる一人になるこ



后也替你大哥哥顶门壮户。”说到这里，不禁流下泪来。李纨听了这话，却也动心，只是贾母已经伤心，自己连忙忍住泪笑劝道：“这是老祖宗的馀德，我们托着老祖宗的福罢咧！只要他应得了老祖宗的话就是我们的造化了。老祖宗看着也喜欢，怎么倒伤起心来呢。”因又回头向宝玉道：“宝叔叔明儿别这么夸他，他多大孩子，知道什么。你不过是爱惜他的意思，他那里懂得，一来二去，眼大心肥，那里还能够有长进呢。”贾母道：“你嫂子这也说的是。就只他还太小呢，也别逼得紧了他。小孩子胆儿小，一时逼急了弄出点子毛病来，书倒念不成，把你的工夫都白糟蹋了。”贾母说到这里，李纨却忍不住扑簌簌掉下泪来。连忙擦了。只见贾环贾兰也都进来给贾母请了安。贾兰又见过他母亲，然后过来在贾母旁边侍立。贾母道：“我刚才听见你叔叔说你对的好对子，师父夸你来着。”贾兰也不言语，只管抿着嘴儿笑。鸳鸯过来说道：“请示老太



とだろふよ」

とそこまでいって、つい涙にくれるのでした。

李紈もそうしたことばを聞いては胸衝かれる思いでしたが、なにぶんにも後室がすでに悲しげにしていることではあり、自分はおわてて出かかる涙も押え、笑顔を作りながらこれを慰めにかかり、

「これもひとえにお祖母さまのご余徳、わたくしどもはひたすらお祖母さまのお蔭をこうむっているばかりでございますわ！あの子がお祖母さまのおことばどおりに育ってくれてさえおりましたら、わたくしどもにとってはこの上ない仕合わせと申すもの。お祖母さまもそれをご覧くださったら、お喜びいただけるはずでございますのに、なぜ反対にそうも悲しげにしていられっしゃいますのでしょうかね」

こういふと、そこでまた宝玉を振り向いて、

「宝玉叔父さん、今後はいまみたいにあの子をほめ上げたりなさらないでくださいね。あの子くらいの年頃で、なにがわかるものですか。あなたがそうおっしゃってくださるのも、あの子に目をかけ引き立ててやろうとのおぼしめしから出たことでしょうけれど、いまのあの子にどうしてその辺のところまで合点がゆきましよう。そうしたことがたび重なると、だんだん慢心して増長もしかねません。そんなことでどうしてあれ以上進歩する見込みがありましようか？」

すると後室が引き取って、

「おまえの嫂さんのいまのことばも、もっとも千万な話。だが、なにしろあの子はまだ年齢もゆかないのだから、まあそうやかましくいうこともなからう。子供のことゆえ、気の小さいところへもってきて、急にきびしいいわれたりすると、とかくぐれたりして、学問もものにならず、せっかくあんたが手塩にかけて育ててきたのもまったく無駄だった、ということにもなりかねないからね」

後室がそこまでいふと、李紈はこらえきれずにぼろぼろと落涙してしまい、あわてて涙を拭くのでした。

と、そこへ当の賈環も賈蘭も揃って姿を見せ、後室のご機嫌を伺います。賈蘭はまた自分の母にも挨拶を済ませて、さてそのあとこちらへきて後室のわきにかしこまります。後室はこういいました。

「わしはいまおまえのお叔父さんから、おまえがうまい対句をこしらえて、お師匠さまもほめていらしたと聞いたところだよ」

それには賈蘭、なんとも答えようとせず、ただ含み笑いをするばかり



太，晚饭伺候下了。”贾母道：“请你姨太太去罢。”琥珀接着便叫人去王夫人那边请薛姨妈。这里宝玉贾环退出。素云和小丫头们过来把双陆收起。李纨尚等着伺候贾母的晚饭，贾兰便跟着他母亲站着。贾母道：“你们娘儿两个跟着我吃罢。”李纨答应了。一时摆上饭来，丫鬟回来禀道：“太太叫回老太太：姨太太这几天浮来暂去，不能过来回老太太，今日饭后家去了。”于是贾母叫贾兰在身旁边坐下，大家吃饭，不必细述。

却说贾母刚吃完了饭，盥漱了歪在床上说闲话儿，只见小丫头子告诉琥珀，琥珀过来回贾母道：“东府大爷请晚安来了。”贾母道：“你们告诉他，如今他办理家务乏乏的，叫他歇着去罢。我知道了。”小丫头告诉老婆子们，老婆子才告诉贾珍。贾珍然后退出。到了次日，贾珍过来料理诸事。门上小厮陆续回了几件事。又一个小厮回道：“庄头送果子来了。”



り。そこへ鴛鴦が進み出て、

「いかがいたしましょう？ご後室さま、晩ご飯のお支度が調いましたが……」

とお伺いを立てます。後室は、

「では、薛の奥様をお呼びしてきておくれ」

こう命じました。琥珀がすぐさま薛未亡人を呼びに奥方の王氏のもとへ使いを出しました。

こちらでは宝玉と賈環が退出しますと、素雲をはじめ侍女見習たちがきて、雙陸を取り片づけました。李紈はなおも後室の夕食の給仕役を務めるために控えています。賈蘭も居残って母親といっしょに立っていましたので、後室は、

「あんたたち母子二人も、わしのお相伴でお上がりよ」

と勧めました。李紈が「はい」と答えます。やがて膳部が並べられたころ、侍女がたちもどってこう報告しました。

「奥方さまからご後室さまにこう申し上げてくれるようにとのことでございました。薛の奥様はこのところみえたかと思うともうお帰りになるというふうで、こちらへ上がってご後室さまにお断わりを申し上げることもかないませぬが、実は今日の食後にお家の方へおもどりになるそうでございます」

かくて後室は賈蘭を自分のわきにかけさせ、一同で食事をしたためましたが、その話はいちいち記すまでもありますまい。

さて、後室がちょうど食事を終えて、手を洗い口をすすぎ、寝台に横になったままで四方山の話をしていきますと、侍女見習が琥珀になにやら告げ、その琥珀が進み出て、後室に取り次ぎました。

「東屋敷の御前様（賈珍）が晩のご機嫌伺いに上がられました」

「では、おまえたちからあの人にこう伝えてもらいましょう——家事を見続けでさだめしお疲れだろうから、どうか帰ってお休みください、お気持だけでもう充分、とな」

侍女見習が老女たちにそれを告げ、老女たちの口から賈珍にその由伝えられましたので、賈珍もそれではと引き取りました。

その翌日、賈珍は出かけてきて、さまざまな家事の処理に当たりました。門詰めの若党たちが入れ替わり立ち替わりきては、あれやこれや



贾珍道：“单子呢？”那小厮连忙呈上。贾珍看时，上面写着不过是时鲜果品，还夹带菜蔬野味若干在内。贾珍看完，问向来经管的是谁。门上的回道：“是周瑞。”便叫周瑞：“照帐点清，送往里头交代。等我把来帐抄下一个底子，留着好对。”又叫“告诉厨房，把下菜中添几宗给送果子的来人，照常赏饭给钱。”周瑞答应了，一面叫人搬至凤姐儿院子里去，又把庄上的帐同果子交代明白。出去了一回儿，又进来回贾珍道：“才刚来的果子大爷曾点过数目没有？”贾珍道：“我那里有工夫点这个呢。给了你帐，你照帐点就是了。”周瑞道：“小的曾点过。也没有少，也不能多出来。大爷既留下底子，再叫送果子来的人问问他这帐是真的假的。”贾珍道：“这是怎么说，不过是几个果子罢咧，有什么要紧。我又没有疑



と用件を報告します。そこへまたやってきた一人の若党が、
「莊頭（莊園の管理人、第五十三回既出）から果物を届けてまいりました」

と報告しました。賈珍はそこで、

「書付は？」

と聞きます。その若党が「はい、これに」とすかさず差し出したのを、賈珍、読んでみますと、時期の果物が書き出してあるばかりで、つけたしのように野菜やら獣やらが若干はいっている程度。賈珍は目を通し終わると、

「これまでこちらの係をしていたのは誰か？」

とたずねました。門詰めめの者の返事では、

「周瑞でございます」

とのこと。そこでさっそく周瑞を呼びつけて、

「書付どおりか、いちいち確認したうえで、奥へ引き渡すようにしてくれ。どれ、わしが送り状の控えを取っておこう、残しておけば照合するのにも便利だからな」

といい、さらにまた、

「台所方にはなして、下人用の料理にいく品か足したのを、その果物を持参した使いの者に出してやり、しきたりどおりに飯を振舞いお祝儀を取らせるようにな」

と指示しました。周瑞は「かしこまりました」と答え、一方では人を使って現品を熙鳳の住居の中庭に運びこませ、また莊園からの送り状と果物とをちゃんと引き渡します。出ていってしばらくしたかと思うと、またはいつてきた周瑞、賈珍に向かってこういいました。

「さきほど届きましたる果物、御前様の方で数量をお検めくださいましたでしょうか？」

「このわしにそんなものを検めておる暇がどこにあらう。おまえに送り状を渡したのだから、おまえの方で送り状に当たって検めておいてくれたらよい」

「いえ、てまえならもう検めてみました。少ないこともなく、さりとて多過ぎるわけもございませぬ。御前様の方でそうして控えをお取りでいらっしやいますからには、改めて果物を届けてまいった者に、この送り状は本物か偽物か、ひとつおたずね願わしゅう存じます」

「それはいったいどういう意味なのだ？ほんのわずかばかりの果物